

第二節 九州と福岡県の気候区分

気候区分は、注目する気候要素に何を採用するかで違ってくる。

世界の気候区分については、ケッペンの気候分類が最もよく知られており、日本の気候は北日本を除くとそのほとんどが温帯多雨気候に含まれる。更に、日本の気候を大きく分けると、日本海型・太平洋型・瀬戸内海型に区分される。

一 九州の気候区分

九州の気候は、気温の地域による差が夏は小さく（もちろん、海拔高度による差はある）、冬は大きいという特徴がある。そこで、一月の平均気温 6°C 、年降水量 2000 ミリメートル、一月の日照時間 150 時間を基準にするると七気候区に分類される（第18図）。

以下、これら七気候区の特徴について述べる。

(1) 日本海型気候区

福岡・佐賀県の北部、および山口県の西部・北部がこの気候である。年平均気温は 15.1 ～ 16°C 、一月の



第18図 九州の気候区分
(福岡管区気象台 1964)

平均気温は六℃以下で他の気候区に比べて寒い。年降水量は一七〇〇ミリ前後で、内海型気候区に次いで降水量は少ない地域である。この地域の最大の特徴は、冬季に、曇りや雨の天気が多いこと、北西の季節風をまともに受けて風の強い日が多いことなどである。

豊津町をはじめ福岡県の北部は、この気候区に含まれる。

(2) 内海型気候区

大分県東部と山口県の瀬戸内海に面した地方がこの気候区である。全国的にみれば瀬戸内海型気候区の一部とみられ、年降水量は一四〇〇〜一六〇〇メートルで、最も年降水量の少ない地域である。日本海型気候区との大きな違いは、冬季の季節風が弱く、晴れの日が多いことである。

(3) 西海型気候区

杵岐・対馬を除く長崎県と熊本県の一部、鹿児島県の西部を含むこの気候区は、年平均気温一六〜一七℃、

一月の平均気温六℃以上、また年降水量は二〇〇〇^{ミリ}を超えるところが多い。なかでも沿岸部は対馬暖流の影響を受け、海洋性の気候の特性が顕著である。

(4) 内陸型気候区

有明海に面して佐賀・熊本平野と福岡県の筑後平野がこの気候区であり、周囲を山地に囲まれている。年平均気温は一五〜一六℃だが、夏の暑さや冬の寒さはともに厳しい。特に熊本の八月の月平均最高気温(三二・五℃)は、南九州の鹿児島(三三・二℃)や名瀬(三一・九℃)より高い。また、この地域は一日の気温変化も大きい。

年降水量は一九〇〇^{ミリ}前後である。風はほかの地域に比べると弱い。

(5) 南海型気候区

宮崎・鹿児島両県の東半分がこの気候区に入る。高温多雨で、冬季は日本の太平洋沿岸地方に共通の晴れた日が多いことが特徴である。

年平均気温は一七℃前後、一月の月平均気温は七〜八℃で暖かく雪の降る日も少ない。年降水量は、二〇〇〇から三〇〇〇^{ミリ}以上に達する。

(6) 山地型気候区

九州中央部および山口県の山地などが、この気候区に含まれる。年平均気温は一四℃以下で、一月の月平均気温は四℃以下である。十一月から四月末までは霜が降り、十二月から四月までは雪がみられる。

年降水量は二〇〇〇^{ミリ}メートルを超え、特に九州山地の南東部は三〇〇〇^{ミリ}メートルを超えるところもある。

(7) 亜熱帯気候区

黒潮本流の中に孤立した小さな島々から成っている種子島・屋久島地方から奄美諸島にかけての年平均気温は一九〜二二℃で、一月の月平均気温は種子島、屋久島とも一℃以上、奄美地方では一四℃以上となる。八月の最高気温は三〇〜三二℃で、ほかの気候区に比べて寒暖の差は著しく小さい。

年降水量は屋久島から奄美大島にかけては三〇〇〇^{ミリ}メートル以上で、特に屋久島は雨の多いことで有名である。

二 福岡県の気候区分

福岡県の気候は、大きく山陰型、瀬戸内海型、西九州内陸型の3気候区に分けられている(第19図) (藤元、一九八二、川添、一九九〇)。

(1) 山陰型気候区

福岡県北部沿岸地域の気候区で、冬季に北西季節風をまともを受け、風が強く曇りや雪(雨)の日が多い。このうち、北九州は工場群の存在による特殊な都市型気候を示し、特に北九州工業地区型と細分されている。

(2) 瀬戸内海型気候区

周防灘沿岸の豊前平野の気候型で、降水量が少ない。降水量は十一月から二月が少ない期間であるが、八